

## 誇り

名古屋市立富士中学校3年 田栗 未莉音

「税金を払うことは誇りだよ」

私の何気ない質問に、父は真面目な顔でそう答えた。その時は、私と父で脱税に関するテレビ番組を見ていて、それについて私が父に聞いたのだ。税を払うとはどういうことか、と。

テレビの中の彼らは、家の床、クローゼットの中、さらには階段の下にまで金を隠し、知恵という知恵を振り絞って税から逃れようとしていた。脱税がばれて、とうとう警察に捕まる、となった彼らの姿は、悔しさや苦しきさであふれている。何故？私の目には、その姿がどうにも不思議に見えてならない。私には、なぜ彼らがそうまでして、税から逃れたいのかがわからなかったのである。税が、税を払うことが、人にそれほど不利益を生むものか。まだ子供な私が払える税とは、消費税ほどしかない。これでも立派な納税者だとも思ったが、テレビの中の彼らはもっと重い税を払っているのだろう。彼らの気持ちを知るには、少しばかり経験が足りない。税を払うとはどういうことか。それを知るなら、彼らと同じ「納税者」に聞くのが一番だろう。気付けば私は父にその質問を投げかけていた。

そして、それに対する父の答えが「誇り」だった訳だが、その言葉の真意が、私にはわからなかった。誇り。どうにも抽象的なその言葉に、私はさらに頭を悩ませる。そんな私の様子を察してか、父は優しく教えてくれた。自分たちが払った税金は、自分たちも知らぬところで社会の役に立っているのだと。

「知ってる？学校の備品や教科書も、税金で作られているんだ。他にも、病院や公共サービスも税金から支払われているんだよ。」その一言で私は父の言った「誇り」の意味がわかった。税金とは、社会の土台なのだ。私たちが生活できているのは税金あってのことなのだ。その頃はまだ私も小さかったから、詳しいことはわからなかったが、社会をつくっている、よりよくしている税金を払うことは誇りだと言う父の気持ちにひどく納得したのを覚えている。

中学生になって、税に助けられている、というのを実感することが多くなった。自分たちが使えるこの水も、医療も、学校も、全て税金によるものだと思うと、感謝でいっぱいになる。私はまだ、自分でお金を稼ぐことはできない。社会のために税を払う、ということもできない。実際、脱税者の気持ちも少しは理解できるなと思ったのだ。自分のために稼いだお金が、他人のために消費され、減っていくなんて、いやだと思ふ気持ちも。それでも、私がこれから社会人になり、自分で税を払う日が来たら、そんなマイナスな気持ちは考えず、この税が社会のためになる、と誇りを持った納税者になりたい。